

美術館におけるインタープリテーション

著者	柳田 一郎
雑誌名	Nature of Kagoshima
巻	35
ページ	17-19
別言語のタイトル	The Interpretation at the Kirishima Open-Air Museum
URL	http://hdl.handle.net/10232/18067

美術館におけるインタープリテーション

柳田一郎

〒 890-0034 鹿児島市田上 5-16-34 環境カウンセラー・鹿児島県霧島アートの森

■ はじめに

平成 20 年度の日本環境教育学会の大会は、学習院女子大学で開催された。私も例年通り発表の予定だったが、美術館の行事のため出席できなかった。予定していた発表を、ここで、改めて御報告申し上げたい。

私は、平成 19 年 4 月 1 日付けの県定期人事異動により、鹿児島県文化振興財団に出向し、副館長として、この現代野外美術館に勤務している。

■ 「インタープリテーション」とは

いわゆる英語の「通訳」を意味する単語である。しかし、環境教育関係者の間では「自然解説」とも訳され、自然公園（ビジターセンター等）や自然関連施設（自然の家等）において、その地域の自然を守るため、来訪者にその周囲の自然やマナーなどの情報を伝達する技術を言う。

発表者は、この言葉を次の通りに定義しており、自然解説にとどまらず、観光や教育の分野、さらには日常の「プレゼンテーション」全般にも広く応用できる技術と考えている。

定義：「伝達困難な事象を、分かり易い言葉や動作、道具などを工夫して伝える技術」

また、この活動にたずさわる人を、「インタープリター（自然解説員など）」と呼ぶ。

ここでは、現在勤務中の美術館において、「インタープリテーション」を意識して試行・実践したことについて、まとめてみたい。

■ 「鹿児島県霧島アートの森」とは

- (1) 開設日 平成 12 年 10 月 12 日（9 年目）
- (2) 来館者数 平成 21 年 2 月末現在 76 万人（年平均 10 万人、当初計画の 2 倍）
- (3) 特色

①鹿児島県立の美術館—鹿児島県の「霧島国際芸術の森基本構想」により設置。

②現代アート（彫刻）を収蔵—国内外の著名な作家による巨大な作品群（屋内 38 作家、屋外 22 作家）、「戦後から今日の彫刻」収集、年 3 回のコレクション展、年 2 回の特別企画展。



アートの森・シャングリラの華。



アートの森・秋の一日。

Yanagita, I. 2009. The Interpretation at the Kirishima Open-Air Museum. *Nature of Kagoshima* 35: 17-19.

✉ 5-16-34 Tagami, Kagoshima 890-0034, Japan (e-mail: i-ecol@po2.synapse.ne.jp; tel: 099-258-2710). URL: <http://www5.synapse.ne.jp/ecoiy/synapse-auto-page/>

③霧島屋久国立公園の自然と景観に融合—霧島連山の北・栗野岳中腹標高 700 m の高原に位置。

④国内最大級の野外美術館—面積 13 ha, その 5 割は霧島の自然林。

⑤都市から離れた三県境（鹿児島・熊本・宮崎）に立地—アクセス不便（鹿児島市から高速経由 1 時間 30 分）と県外客多数。

■ 霧島アートの森における作品解説の手法

(1) 屋内作品 38 作家

①解説カード設置—屋内作品, 表側に作品解説・裏側に作家プロフィール。

②ギャラリートーク（屋外を含む時も）—主に団体用, 学芸課長・学芸員担当。



副館長による園内ツアー。



学芸課長による園内ツアー。

(2) 野外作品 22 作家

①園内ツアー—毎日曜日午後, 副館長・学芸課長・学芸員担当。

②DVD 上映—映像による説明を多目的ホールにおいて終日上映。

特に, 野外作品の園内ツアーにおいて, 建設時からたずさわっている熟練の学芸課長が, 巧みな話術で楽しく親しみやすく説明し, 好評を得ている実績がある。

また, 学校現場から赴任した学芸員によるツアーなどは, 教育現場のニーズを把握し, 児童・生徒・学生への説明に定評があり, 学校の多人数団体に対応することが多い。

■ インタープリター経験者（報告者）から見た解説の特色と（→）さらなる工夫

(1) 作品解説について, 季節・天候により作品の見え方に変化がある。



副館長による写真を利用した園内ツアー。



園内ツアーで使用する写真シートの 1 枚（晴天時の正面遠景）。

→A4 サイズ写真、雑誌・新聞などのコピーによるベストタイムの紹介。

(2) 自然解説について、天然林、野生動物、国立公園など素材が豊富である。

→国立公園制度、詳しい野鳥解説や特徴的植物などの解説を導入。

(3) 技法について、会話とともに作品や自然物という「実物」の紹介が主である。

→写真・図鑑、紙芝居など小道具も採用、立ち位置の配慮など。

(4) 環境教育について、豊かな自然の中で、意識せず実施してきた。

→意識して、特に四季を通じた自然の変化を強調するなど自然素材を活用、地球温暖化防止活動などにも参加しつつ、リピーターの確保にも配慮。

■ 参加者の反応

好評で、これまでに積み重ねられた経験に裏付けされた情熱溢れる解説など今回の小さな工夫が、ますます効果を上げていると判断している。

楽しいツアーの様子が、個人のブログでも紹介されるようになったほか、園内ツアーを経験した国内外の旅行会社添乗員さん達からのリクエストが来るようになった。

(1) 同行者を連れたりピーター — 「家族や友達にも聞かせたい」、「四季を味わいたい」。

(2) ファンレター — 「楽しかった」、「四季を体験したい」、「デートの付加価値だ」。

(3) 満足度の向上 — 「説明を聞くと分かりやすい」、「芸術は科学だ」、「安い」。

■ 思いがけない御訪問とインタープリテーション実践

平成21年2月6日金曜日の午前中、常陸宮殿下・同妃殿下が、ご友人らとともにプライベートな旅行の途中にお立ち寄りになられた。芸術鑑賞とともに野鳥観察を計画され、報告者が日本野鳥の会会員であることから野鳥のご説明役を、学芸課長が美術のご説明役をつとめさせていただいた。

常陸宮殿下は日本鳥類保護連盟の総裁でもいらっしゃるもので、専門家に対してインタープリテーションをさせていただくという光栄に、思わず力が入った。双眼鏡と望遠鏡を準備、素晴らしい晴天の下、園内を1時間ほどを散策していただきながら、以下を中心にご説明、初春の自然を楽しんでいただいた。

(1) 野鳥生息数について—建設前の環境アセスメントによる野鳥確認種数81種とオープン後8年間の職員確認種21種、合計102種。

(2) 当日の観察種について—スズメ、ヤマガラ、シジュウカラ、ハシブトガラス、ミヤマガラス、イカル、シメ、シロハラ、アオゲラ、ジョウビタキ、ヒヨドリ。

(3) カッコウの初渡来観察について—昨年、日本野鳥の会に登録する全国の自然系施設の中で最も早く、夏の渡り鳥カッコウの本土渡来を園内で確認（平成20年5月11日）。

(4) その他の自然の話題について—降雪状況、花々の開花時期（コブシ、マンサク、ミツマタ、ヤマボウシなど）、樹木名、タブの巨木樹齢、シカ生息状況と被害など。

(参考) 鹿児島県霧島アートの森 HP <http://www.open-air-museum.org/>